

[研究室だより]

1996年度東大シンポジウム

## 「ロシアはどこへ行く？」について

1996年9月13日(金)・14日(土)の二日間にわたって、東京大学本郷キャンパスの山上会館で「ロシアはどこへ行く? ——歴史・文化・社会——」という国際シンポジウムが開催された。このシンポジウムは、外国からの招待講演者9名(当初の予定では12名だったが、3名が残念ながら病気のため来日をキャンセルした)を交えて、ロシアの現状と未来について、歴史・社会・文化など、様々な側面から学際的に討議しようという趣旨のものである。主催は「東京大学ロシア東欧研究連絡委員会」、共催は東京大学社会科学研究所、事務局は東京大学文学部スラヴ語スラヴ文学研究室、シンポジウムの実施責任者は東京大学社会科学研究所所長の和田春樹教授(ロシア史)。主催者となった「東京大学ロシア東欧研究連絡委員会」とは、あまり耳慣れない組織かも知れないが、教養学部、文学部、法学部、経済学部、教育学部、社会科学研究所など、東京大学の様々な部局に分散しているロシア東欧研究者(教育および助手)が自主的に集まったもので、いまのところまだ公的なステータスを持たない「任意団体」にすぎない。しかし、旧ソ連の大学との学術交流や留学生の派遣といった、ロシア研究者全員に関わる全学的な問題を必要に応じて議論するため、かなり前から年1回程度会合を持ってきた。この委員会のメンバーが共同で国際シンポジウムを開くことは、数年前から懸案になっていたのである。今回、この「委員会」の名の下に、タコツボ的専門分野どうしの障壁を越えて、様々な部局が本当に共同でシンポジウムの準備にあたったことは、是非強調しておくべきことだろう。

会議開催のための予算としては、東大独自のシンポジウム基金に申請を出し、そこから配分を受けたが、低金利の影響で割当額が非常に低くなったため、急遽、他の財源を捜さなければならなくなった。しかし、幸い、国際交流基金から「日欧国際会議助成」をいただくことができ、国際会議のために必要な予算のミニマムはなんとか確保できた。

会議には同時通訳を入れ、一般の聴衆に対して公開のものとした。ロシアへの関心が低下しているようにも思える時節柄にもかかわらず、かなりの反響を呼び、会場は2日とも満員で一時は立ち見も出るほどになり、熱気ある討議が行われた。また、このシンポジウムに基づいたテレビ番組がNHKによって製作され、早速1996年9月19日にはNHK教育TVで放映された。さらに『現代思想』(青土社)誌では、この会議の様々な報告を軸として、現代ロシアの社会と文化・思想に関する特集号を作る計画が進んでいる(1997年4月号の予定)。

もっとも、国際会議に慣れないスタッフが手さぐりで、しかも超低予算のため実務関係はすべて「手弁当」で準備を進めたというのが実情なので、きれいごとばかりでは済まなかった。失敗したこと、不本意なことも、もちろん数え上げれば切りがない。準備段階では、心ない官僚的な対応に腸が煮えくりかえるような思いをさせられることもあれば、意気を感じてくださった方々からの思いがけない支援にほろりとさせられることもあり、この程度のささやかなシンポジウムであっても、様々な人々との絡み合いのなかでしか物事は動いていかないものだというのを、痛感させられた。特に山上会館の同時通訳施設が故障していて使えず、簡単に修理もできない状態にあると直前に判明したときは、目の前が真っ暗になった。急遽、同時通訳の専門業者に頼んで事なきを得たが、もともと赤字覚悟の厳しい予算でやりくりしていたところに、そのため予想外の費用が50万円以上も降りかかったのである。これは公正に考えて、いったい誰が負担すべき費用なのだろうか。そもそも大学の「看板」とも言うべき国際会議場の管理がこれでは困る。割り切れない思い

が残った。

しかし、そういったことのすべてにもかかわらず、シンポジウムは全体としてはまずまずの成功だったと自己評価しても、ひどい自画自賛にはならないのではないかと思う。

今回のシンポジウムの大きな特徴は、ロシアの様々な分野に関わる研究者・文化人の「インターディシプリナリー」な会議であったということである。歴史学者や政治家から文学研究者、そして作家までが一堂に会して議論する機会は、あるようでいてじつはなかなかない。学問的な問題の厳密な討議の場というよりは、ロシアに関心を持つ様々な分野の人々が出会う「広場」として、多少なりとも意味があったと評価していただければ、やっただけのことはあったと思う。ただし、この種の「学際的」な試みには、日本側の組織が必ずしも対応し切れていない面もあったことも、否定できない。大学内の組織の垣根を越えて共同作業をするのは、予想以上に難しいことだと思知られることもしばしばだった。今後、大学内の組織、そして学会の組織など、様々なレベルで学際的な研究交流・協力ができる態勢を作っていくために、いっそうの努力が必要なのではないだろうか。

準備側の人間として、特に感慨が深いのは、自前の予算をもともと持たない、大学内の研究者の自主的な組織であっても、やる気さえあれば、まがりなりにもこれだけの規模の国際会議が開催できたということである。ペレストロイカ以後、ロシアと日本の行き来はそれ以前に比べてはるかに自由になった。しかし、そのわりには研究や文化の面での交流が進んでいないのが現状である。個人的な交遊の範囲は別として、全体として見れば、日本のロシア研究は海外ではまだまだほとんど認知されていない。今回お招きしたゲストの方々も、みな異口同音に、「日本にこれだけのロシア研究があったのか」とびっくりされていた。もっと国際交流のための努力を積み重ね、互いを知ることが必要である。日本は今後、国際的なロシア研究のための「出会いの場」としての役割をもっと果たしてもいいのではないかと思う。

最後に、いちいちお名前を挙げることは控えるが、シンポジウムのために協力して下さった多くの方々に心から感謝させていただきたい。シンポジウムの実施が東大内の諸部局の共同作業の結果、初めて可能になったことは言うまでもないが、やはり事務局を担当したスラヴ科のメンバー、特に裏方として会場の設営から招待客の個人的な世話に至るまで、英雄的にヴォランティアとして働いてくれた学生・大学院生の諸君や、陣頭指揮をした助手の清水道子さんの奮闘なくして、このシンポジウムの成功はあり得なかった。

シンポジウムの後で、学外の何人かの人から（決して悪気でないにせよ）、「東大って、お金があっただけですね。こんな会ができるんだから」とか、あるいはその逆に「大学って、ただ働きさせられる人手があっただけですね」「どうせろくにお金なんか出していないんでしょ」などと言われて、「世間の目とはそんなものなのか」と思知らされた。本当のことを言えば、たとえ俗世間や金勘定とは無縁のように見える大学にいても、いつもこんな風に皆が心を揃えて「ただ働き」するわけではない。むしろ、これはとても例外的な「お祭り」のようなものだったと思う。そして、実態は「ただ働き」などという生易しいものではなかった。準備に関わった多くの者が、肉体的にも、精神的にも、時間的にも、金銭的にも、自分の持っているものを絞り出すようにし、相当な犠牲を払うことによって初めてシンポジウムが遂行できたのである。そのことをせめてここに書きとめておくのは、事務局を預かった私の義務だと思う。もっとも、学生（特に大学院生）にとっては、裏方の仕事を通じてさへでも、犠牲以上に、今後の学問的研究のために得るものがあったのではないだろうか。かなり大変だったけれど、とても楽しい体験だった。私はそう、楽天的に考えている。そう考えられなかったら、もちろん、このようなシンポジウムをやる意味はない。

(1997年2月10日 沼野記)